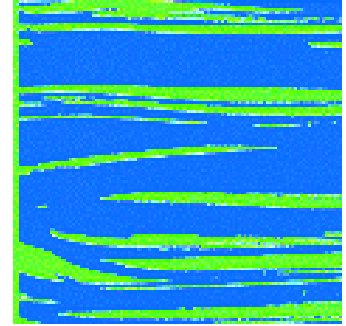


日本行動分析学会ニューズレター J-ABA ニュース



2008年 春号 No. 50 (2008年6月8日 発行)

発行: 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学文学部心理学研究室内

FAX: 075-465-7882 (日本行動分析学会事務局と明記)

URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

| | | |
|--|-------|-------------------------|
| 第26回年次大会のご案内 | | 日本行動分析学会第26回年次大会準備委員会一同 |
| 公開講座: 自閉症とコミュニケーション | | 島宗 理 |
| 私とABA (3): ABA会長時代の思い出 | | 佐藤方哉 |
| 連載: いま、こんな研究しています (5) | | 道城裕貴 |
| 自著を語る: <あなた>の人生をはじめのためのワークブック: 「こころ」との新し いつきあい方・アクセプタンス&コミットメント | | 武藤 崇 |
| 「行動分析学が学べる日本の大学・研究機関」情報更新のお願い | | 研究教育推進委員会・広報委員会 |
| 編集後記 | | ニューズレター編集部 |

第26回年次大会のご案内

日本行動分析学会第26回年次大会準備委員会一同

数日前までご発表予定の先生方からの発表抄録がどんどん届いておりました。いよいよ年次大会が近づいてきた思いを強くしております。

さて、すでにご案内をさせて頂きましたとおり、2008年度の年次大会を横浜国立大学で開催させて頂くことになりました。行動分析学会の横浜国立大学での開催は初めてとなります。横浜・神奈川は、国立特殊教育総合研究所（現：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）において東 正先生と共同研究者の先生方が、日本において行動分析学にもとづく教育的な支援について実践を開始された地域でもあります。現在、それらの活動は行動教育研究会として継承・発展されています。本年次大会でも行動教育研究会の皆様にご協力をお願いしておりま

すが、それらの歴史をもつこの地に皆様をお迎えし、年次大会を開催できることを準備委員会一同、心から喜んでおります。

今年の年次大会は、昨年の立教大学よりもさらに暑い時期での設定になってしまいましたが、8月9日（土）・10日（日）の2日間としました。会場は、横浜国立大学の常盤台キャンパスにある教育文化ホールを中心に設定しています。会場までのアクセスですが、横浜というイメージからアクセスのよさを思い浮かべられるかもしれませんが、通称「わだ坂」という急な坂道（私は、健康のことを考え現在は利用していません。もっぱら学生の通学路となっています）をはじめとして、最寄りの駅から徒歩で20分程度かかってしまいます。JR横浜駅からバスを利

用されるのがよいと思いますが（片道 210 円）、3～4 名の場合はタクシーで約 10 分（ワリカン 500 円程度）も便利です。体力に自信のある方は、横浜市営地下鉄三ツ沢上町駅、さらにはあのわだ坂を通る相模鉄道和田町駅からお越し下さい。「わだ坂」の特典は、一番上まで登ったときの爽快感と振り返るとランドマークタワーをはじめ横浜みなとみらい地区が一望できることです。詳しい会場アクセスについてはホームページをご覧ください（http://www.ynu.ac.jp/access/acc_index.html）。

大会の内容につきましては、詳しくは 7 月発送予定の大会プログラム・論文集をご覧くださいと存じますが、現時点での内容を「こっそり（最終確定ではない、という意味です）」お知らせいたします。まず、特筆すべきは、多くの会員の皆様のご協力を得て、約 105 件のポスター発表のお申し込みを頂いていることです。例年が 70 件前後ですので、このままだと行動分析学会年次大会始まって以来の発表件数になるとうれしい悲鳴を上げています。加えて自主シンポジウムを 2 件頂いております。1 件は、石井拓先生の企画による「刺激等価性研究の最近の動向 - 基礎研究からの知見と特別支援教育における応用研究の成果について」、もう 1 件は、行動教育研究会の皆様のご協力のもとで、「障害のある人と支援者の相互の力量を高める試み - 日本行動教育研究会 35 年間の実践」です。結果的に、いわゆる基礎と応用からそれぞれ 1 つずつの企画を頂きましたが、いずれも本年次大会のテーマである「特別支援教育と行動分析学」にふさわしい内容と考えております。活発な意見交換ができることを楽しみにしています。

さらに、岡ノ谷一夫先生（理化学研究所チームリーダー）に招待講演をお願いしています。「小鳥の歌からヒトの言葉へ（岩波書店）」を読まれた会員の皆様も少なくないと思います。私は、ジュウシマツのさえずりが、オスがメスの気を惹くためとは一度も考えたことがありませんでした。巻頭に「ジュウシマツの歌に耳を傾

けたことがあるだろうか。なにげなく聞き流しているうちはいつも同じに聞こえるが、じつは意外に複雑で、なんと『文法』があることが発見された。この文法は、オスがメスの気を惹くために、より華麗な歌をうたおうとして発達したのではないか？それに伴って、脳神経も複雑化したのでは？人間言語の起源もひょっとしたら...。大胆仮説が言語進化研究にまったく新たな展開をもたらした。苦労と喜びと興奮いっぱいの研究者人生とともに綴られる、言語進化の謎への挑戦」と紹介されています。関心をもたれた方は定価 1100 円です。今すぐご購入を！。知的興奮の高まる一時が味わえると考えております。皆様、もうしばらくお待ち下さい。

さて、本年次大会では「特別支援教育と行動分析学」をテーマとしました。平成 19 年 4 月の学校教育法の改正にともなう特別支援教育は学制の大改革であると考えております。この間、さまざまな取り組みが全国各地で精力的に行われ、また文科省も毎年それらの実績を各県毎に数値化して公表しながら「尻を叩いてきた」と考えています。しかし、一時期の熱気も過ぎ去り、また、疲れや綻びも見え始め、そのまま有耶無耶になりかねない危惧も持っております。一方で、特別支援教育の中であらためて行動分析学について注目されてきました。行動分析学の貢献については、すでに多くのところで周知されてきていますが、一方で行動分析学をもとに特別支援教育の充実に取り組んできている研究者や実践家からもいくつかの懸念が出されています。

それらの問題は、行動分析学研究 21 巻 1 号及び 22 巻 1 号の 2 回にわたって特集として取り組まれています。あらためて年次大会として「特別支援教育と行動分析学」について基礎・応用にかかわらず会員の皆様と共に考えてきたいと企画させていただきました。大会では、このことに直接関係する 2 つの企画を設けました。1 つは、準備委員会企画シンポジウムとして主に神奈川を中心に小学校及び中学校の教育現場において特別支援教育の充実に取り組まれ大きな実

績を挙げていらっしゃる先生方から現状と今後の課題について話題提供を頂くとともに、指定討論の先生のガイドにより考えて深めていきたいと考えております。さらに、望月 昭先生(立命館大学)から特別支援教育の充実と行動分析学との貢献について特別講演を頂きます。特別講演をプログラムの最後として、あらためて会員の皆様がそれぞれ現場に課題を持ち帰り、次年度に向けてさらに実践・研究に取り組むなかで特別支援教育のさらなる充実と行動分析学のさらなる発展につなげたいと考えています。

本年次大会には、もう1つの特別な企画があります。それが教育セッションです。すでに第1号通信でもご案内させて頂きましたが、はじめての試みとして年次大会テーマに関連する4つの内容ははじめての方にもわかりやすく、かつ明日からの研究や実践に生かせることを念頭に設定しました。松見淳子先生(関西学院大学)による「子どもの社会適応とその支援」、平澤紀子先生(岐阜大学)による「行動問題とその支援」、島宗 理先生(法政大学)による「チーム力と専門性の向上への支援」、大石幸二先生(立教大学)による「校内支援体制と連携への支援」です。教育セッションは、学校心理士更新ポイントとして申請中です。事前予約の形はとらず、当日の受付としてできるだけ参加できやすいようにしたいと考えています。また、神奈川県内の学校関係者にも参加を呼びかける予定

です。学部生、大学院生、さらには学校関係者などこれから学ぼうとする方々のための入門講座として考えています。ご参加をお待ちしています。

最後になりましたが、大会準備委員会では宿泊の斡旋をしておりません。申し訳ありませんが、各自お手配下さいませようお願いします。JR 横浜駅、横浜みなとみらい地区、関内・伊勢佐木町の周辺には宿泊施設があります。また、お弁当の用意もしておりません。当日は、学内の食堂(学生食堂です。ごめんなさい。味は期待しないでください。何かお腹に入れるという気持ちだとショックが少ないと思います)をご利用下さい。近くにはコンビニエンスストア、ガスト、横浜弁当が各1件です。数少ないのでご注意ください。

大会ホームページをはじめ、準備が至らず皆様にはいろいろご迷惑をおかけしております。ここであらためてお詫び申し上げます。今後、大会準備に一層務めますので、今後とも何卒よろしくお願い致します。

当日、会場で皆様にお会いできることを楽しみにしています。どうぞ、お気をつけてお越し下さい。横浜国立大学のうっそうとした森とともにご参加を心からお待ちしています。

それでは、皆様、集合は8月9日(土)午前9時15分です。

公開講座：自閉症とコミュニケーション

法政大学 島宗 理

公開講座のお知らせです。

標記の公開講座の開催を日本行動分析学会から後援していただけることになりました。会員の方は割引価格でご参加いただけます！ 皆さまのご参加をお待ちしています。

題目：『自閉症とコミュニケーション』

主催：法政大学ライフスキル教育研究所

後援：日本行動分析学会

日時：2008年7月12日(土)13:00-18:00

(詳しいスケジュールは案内をご覧ください)

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

外濠校舎 S406 教室

招待講演: 『絵カードによるコミュニケーション』

アンディ・ボンディ博士 (Andy Bondy, Ph.D)

*講演は日本語に通訳されます。

シンポジウム: 『我が国における最新の研究と実践』

話題提供者: 高橋甲介 (筑波大学大学院)

熊 仁美・竹内弓乃・原 由子 (慶應義塾大学大学院)

渡邊 倫・齊藤宇開 (たすく株式会社)

指定討論: アンディ・ボンディ

司会: 島宗 理 (法政大学)

参加費: 一般 ¥1,500- 学生 ¥1,000-

日本行動分析学会会員 ¥1,000-

定員: 先着 200 名

お申込みは web またはファックスで URL:

<https://www.hosei.org/> FAX: 03-3264-6099

お問合せは法政大学エクステンションカレッジまでお願いします。 TEL: 03-3264-6098

Mail: help@hosei.ac.jp

講師の Andy Bondy 博士は、PECS (Picture Exchange Communication System) の開発者であり、自閉症を持った子どもたちにコミュニケーションを教える仕事を長年続けておられます。現在では、彼が代表者を務める Pyramid Educational Systems 社のサービスが米国だけでなく、英国、オーストラリア、フランス、カナダ、そして日本でも提供されるようになっていきます。

シンポジウムでは、我が国、特に関東近郊において、自閉症児にコミュニケーションを教えている研究者や実践家の方に話題提供をしていただき、コミュニケーションを苦手とする子どもたちに、何を、どのように教えられるか、最新の情報を提供していただきます。

自閉症スペクトラムやその他の発達障害をもった子どもさんと関わる教職員や家族の方々、将来、発達臨床の仕事をしたいと考えている学生や院生さんなど、ぜひ、ふるってご参加下さい。

私と ABA (3): ABA 会長時代の思い出

星槎大学 佐藤方哉

最近、ABA の大会 (国際行動分析学会年次大会: Association for Behavior Analysis International, Annual convention) に参加する日本人がとて増えてきました。そこで、前々号から 3 回連続で、ABA 参加大ベテランのおひとりである元帝京大学教授 (現・星槎大学教授) の佐藤方哉氏から、ABA の大会について、お話を伺いました。インタビューアーを務めて下さったのは、元帝京大学 (現・駒澤大学人文科学研究科) の塚田静香さんです。勿論、実際にインタビューを行なって、佐藤先生にも原稿に目を通して戴いておりますが、記事にするにあたって、編者で

ある望月が多少の“創作”を加えております。連載最後の 3 回目は、国際行動分析学会の会長を務めたときのお話を伺いました。

会長の思い出

M: ABA の会長を務められたときの思い出はありますか? 日本の学会の理事会、あるいは常任理事会に相当するものは、年に何回ぐらいあるのですか?

佐藤: ABAでカウンセル(council)と呼んでいるものが、日本の学会の理事に相当するものだと思います。ABAの大会の前々日か、ワークショップが始まる前日に会議(council meeting)があります。まず午後からSABAの会議があって、翌日、1日かがりてABAの会議があります。会長はこの会議の議長を務めますから、その前日にExecutive Directorのマリア(Maria Malott)に会って議題の打合せなどをします。議題は予め準備されていて、厚さにして15cmぐらいの量があります。

M: それを会議に出る前に、全部、読むんですね?

佐藤: まあ、ざっとですが...。そして、ABAの大会が終わった後で、ABAの会議が半日あります。それとは別に秋に1回、午後半日がSABAの会議、翌日1日がABAの会議という日があります。これが定例の会議ですが、特別な事情があると、臨時会議を開きます。それも半日がSABAの会議で、翌日1日がABAの会議という形式です。議長を務めるのは会長で、会長には投票権はありません。票決が半々に割れたときだけ、会長の意見で結論が決ります。

M: 先程からSABAという言葉が出てきますが、SABAとABAは、どんな関係になのでしょうか?

佐藤: SABAとは“Society for the Advancement of Behavior Analysis”の略で、ABAの活動のお金に関する部分を扱っています。アメリカの法律で、ABAのような学会が、お金を受け取ったり、支出したりすることができならしく、その部分をSABAが受け持っています。ABAの大会参加費を払うとき、一緒に寄付を払うことができますが、その寄付を受けるのもSABAですし、賞を出すのもSABAです。前に言ったように、ABAの前会長が、SABAの会長

を務めます。カウンセルの構成で大きく違う点は、SABAには学生代表のカウンセルがないことです。ABAには、3人の学生代表がいて、会長と同じように、3人が順番に引き継ぎながら務めていきます。但し学生カウンセルは3人いても、投票権は1票だけしかありません。

M: 日本で言えば理事会に相当する組織に、学生代表がいる、というのは、いかにもアメリカらしいですね。学生代表理事、ということですね。

佐藤: 私が会長を務めたときに、3つの提案をしました。1つは、国際担当のカウンセルを1名置くこと、2番目は北米以外の地で大会を開催すること、3番目はInternational Grantを設けることです。マリアに言わせると、たった3つしか提案をしなかった会長も珍しいが、提案が100%実現した会長も珍しい、ということです。大抵の会長は10ぐらい提案をするけれど、殆ど通らないらしい...。もっとも、私は、他にもアイデアはあったのですが、提案する前にマリアの意見を聞いて、通る可能性が高い、と言われたものを提案したという事情もあります。

T: ABA開催地で、印象に残っている所はありますか?

佐藤: 開催地のことは、余り印象に残っていないけど、ミルウォーキーはビールが安くて旨くて良かった。ナッシュビルも良かったです。ニューオリンズも割合良かったかも知れない。やっぱり、土地のことよりも、食べ物とかお酒が良かったところが印象に残ります。ミルウォーキーでは、日本人何人かでビールを呑みに行ったのですが、沢山呑んだせいもあるかも知れませんが、店からおごって貰ったりしました。料理は余り美味しくなかった...。ミルウォーキーは、全米で一番、レストランの料理の1皿の分量が多いと言われているらしいけど、味は悪い。大統領

も来たことがあるというドイツ料理の店に行ったけど、あんまり美味しくなかった。いつだったか、ビル (“Bill”, W. L. Heward) 夫妻に連れて行って貰ったポルトガル料理の店が良かった。どこだったかは忘れてしまったけれど...

M: 毎年、ヒューワードとは食事なさいますね?

佐藤: そうですね、ビルとディックとは、だいたい毎年食事をしています。

T: 国際会議というと、言葉のことが気になるのですが...

佐藤: 私にも、殆ど聞き取れない英語の発表がたまにあります。そういう例を除けば、言葉の壁は感じません。アメリカ以外の国で開かれる大会でも、会場の中では英語が通じます。挨拶や簡単な会話ぐらいは、片言の土地の言葉で通用します。以前、ハルツェンの会議で、リベスの講演の座長 (chair) を頼まれたことがあります。たしかスペイン語圏の都市で開かれたときで、リベスは勿論英語を話しますが、敢えてスペイン語で講演すると言うので、私もそれに合わせてスペイン語で司会をしました。

ABA は元気の素

T: 最後に、佐藤先生にとってABAの大会とは、何ですか?

佐藤: (こんなこと、あんまり書いてもらっちゃ困るけど) 《息抜き》です。言い換えれば、1年分の鋭気を養う機会です。ABAに行ったら元気を取り戻します。出かける前は発表の準備があるし、日本に帰れば授業を休んだ分の補講が待っていますから、ABAの前後は忙しくて大変です。でも、その苦勞を補って余りあるほど、プラスの方が多いですね。

M: 元気が出る、というのは、新しい研究のアイデアや情報が得られるという意味もありますか?

佐藤: 昔は毎回のよう新鮮な情報がありました。ところが、最近は残念ながら、新しい、刺激的な研究が出ていないような気がして恐れています。私が歳を取って鈍くなったということもあるのかも知れませんが、ABAに行ったら色々な人に最近10年間で画期的な研究は何だろう? と聞いても、皆、考え込んでしまう。咄嗟に返事が返って来ない。

M: それでも、ABAに行くと元気になる?

佐藤: 元気になる。色々な人に合えるのも楽しみだし。

T: ABAの会場では、佐藤先生はいつでも笑顔ですよね?

佐藤: そうですか? 最近、もう日本の学会には殆ど行かなくなっちゃって。毎回欠かさずに参加しているのは、ABAとj-ABA(日本行動分析学会)だけになりました。

キャッシュ・バー

T: ABAの会場で、いつも片手にワインを持ちながら歩いてらっしゃる佐藤先生の姿が印象に残っています。私は今年初めてABAに行ったのですが、j-ABAとの違いは、いつでも片手にお酒を持っていられるところだと、思いました。

M: たしかにABAの大会では、“EXPO”や“Behavioral Bash”など、エンターテイメント的な催しはもとより、ポスター発表の会場にも必ずキャッシュバーがあって、お酒や飲物を売っていますね。北米以外の国で開催するときも、これだけは変わらない...。あれは昔からの伝統ですか?

佐藤: “Banquette”の始まる前や、“ABA Social”では以前からキャッシュバーがありました。ポスター発表の会場で酒を売り始めたのは、比較的最近だと思います。1996年に日本の横浜プリンスホテルで、ハルツェン達の会議を開いた時、ポスター発表の会場にキャッシュバーを用意しましたから、その頃には、もうABAのポスター会場でもお酒を売っていたのでしょ。

M: 最初、横浜プリンスホテルは、キャッシュバーを出すことを渋ったとか...?

佐藤: そう、ホテルの人達も、キャッシュバーというやり方を知らなかったらしい。キャッシュバーというのは、ワインやビール、ソフトドリンクやカクテルなどを揃えた小さなバー・コーナーを設けて、呑みたい人が、現金引き替えで飲物を受け取る方式ですが、ホテルの人達は、そんなことをしても売れるわけがないと思っていたらしい...。ところが、いざやってみると、予想外な売れ行きで、随分儲かったらしく、終わった後で「こういうやり方もあるんですね」とか言って感心していました。

T: ABAのポスター会場には、入口近くや、幾つかの場所にキャッシュバーがあって、発表者も、聞きに来た人達も、みんなグラス片手に話しをしています。

佐藤: 気軽にお酒を呑めるのは、自分が泊まっているホテルが会場だと、いうこともあると思います。でも、最近、キャッシュバーが高くなった。

M: ワインがグラス1杯で7ドルぐらいですか? 東京だと、少し気取ったフランス料理店のグラスワインの値段と同じですね。高くなった分、確実に味も良くなったと思いますが...。それに、アメリカだからグラスも大きいし。

佐藤: でも以前は、3ドルか4ドルぐらいだった。この2-3年で急に高くなったような気がする。

T: どうしても、お酒と食べ物のお話しになっちゃいますね...。

佐藤: やっぱ、せっかく海外に行ったんだから、日本料理が恋しくなるとか言わないで、現地の美味しいものを楽しむべきでしょう。アメリカはステーキが旨いし、土地によっては、ワニとか、変わった食べ物もある。学問だけでなく、食生活についても、常に未知のもの、珍しいものに挑戦するという精神が必要ですよ。

M: 必要なのは“精神”ではなくて、“行動”では?

佐藤: 勿論、そうに決ってます。そういう意味で言ったんです。

T: では、今日は長い時間を戴いて、楽しいお話をありがとうございました。ABA参加の基礎知識から、学会の歴史、なかなか聞くことができない、会長の仕事やカウンセルの様子など、本当に興味深いお話でした。

リンダ・ヘイズの思い出

[編集]: と、ここでインタビューはお開きになり、塚田さんと一緒に後片付けをしていると、突然、佐藤先生が戻って来ました。

佐藤: あのさあ、ひとつ言い忘れたことがあるんだけど...。たしか81年頃、ABAに行った時、ホテルの部屋を使って、日本酒パーティーを開いたんです。そんなに人が集まるとは思わなかったの、そんなに沢山は用意しなかった。そしたら、思ったより大勢の人が来てくれて、たちまちなくなっちゃった。たしかディック(R. W. Malott)が『行動分析入門』に「でも参加者はほとんどいなかったそうだと書いてるけど、ほとんどいないどころか、ほんとうは大勢来た。

ディックは来なかったから知らないんだよ。そのころ、まだディックとは付き合っていなかったから。そしたら、リンダ (Linda Hayes) が気を利かせて、ウイスキーを1本差入れてくれた。人がいるのにお酒が無いのは寂しい、と。彼女は、その頃ウェスタンミシガンの大学院生だったけど、すごく印象に残っていた。その彼女がABAの会長を務め、日本に来て行動分析学の授業をしてくれた。ABAの忘れられない思い出です。

[编者]: 2時間に及んだインタビューを漸く全て御紹介することができました。3回の連載の間に、佐藤先生は帝京大学を退職され、塚田さんは駒澤大学の大学院に進学しました。読者の皆様、佐藤先生、塚田さん、ありがとうございました。

連載: いま、こんな研究しています (5)

上越教育大学 道城裕貴

私は、2008年4月から上越教育大学の特別支援教育コース(特別支援教育実践研究センター)において助教をしております。大学教員としての初めての生活を楽しみながら、恵まれた環境の中で新たな研究を模索しています。ここでは、私が現在まで行ってきた研究と今後の研究テーマについてご紹介します。

現在まで、学校現場において「発達障害児の学校支援」をテーマとした研究を行ってきました。2008年3月まで関西学院大学にいましたので、2002年度に神戸市で発足した「通常の学級におけるLD等への特別支援事業」に修士課程の時から参加し、約6年間に亘って支援と実践研究を行ってきました。特別支援事業は、大学と学校が連携して通常学級に在籍する発達障害児への支援及び研究を行う画期的な事業です。私も週2回、教室で支援を行う中で、学級担任の先生と協働していくつかの取り組みを行いました。1つは、「めあてカード」や「めあて&フィードバックカード」を用いた取り組みです。通常学級の中で多く見られる「チャイムが鳴ったらすぐに帰ってきて座る」「休み時間にはイスを中に入れる」「授業中、後ろを向かない」などの授業準備行動を「めあて」として各児童の目標として設定し、効果を検討しました。一連の研究から、めあてだけでなく、めあてを守ることができた

かどうかを自分自身でフィードバックする「めあて&フィードバックカード」の方が効果的であり、教室内で用いやすく社会的妥当性が高い支援であることが明らかになりました(e.g., 道城・松見, 2007)。これらの研究において、学校内で「めあてカード」の取り組みが広まったこと、校内の先生方に支援と研究が近いものであると理解してもらえたことが『良かった点』として挙げられます。一方、『苦労した点』は、標的行動を選ぶ際や学級支援を行うにあたって社会的妥当性があるものにしようとした点です。学級担任や児童のニーズ、研究テーマとして明らかにしたいこと、観察のしやすさなど、研究前の調整に時間がかかりました。

もう1つの研究テーマは、「模擬授業場面における集団トレーニング」です。教室には学校独自のルールがあり、子どもたちは入学後に様々なルールを学びます。しかし、特別な配慮を必要とする発達障害児にとっては、通常学級の中で自然とルールを学ぶのは難しいものです。そのため、就学前から発達障害児に授業準備行動を模擬授業場面において教えるという支援を行うことにしました。授業準備行動は、「学習用具を机の上に出す」「プリントを後ろにまわす」など、事前のアセスメントによって選択しました。模擬授業場面は、机、イス、ランドセルな

どの物理的環境、授業、指示といった点で実際の教室場面と類似するようにし、大学院生が児童役として参加しました。トレーニングの結果、模擬授業場面において授業準備行動を身につけることができ、また就学後のチェックリストによって般化が見られたことが明らかとなりました(e.g., 道城ら, 印刷中)。また、就学前に限らず、就学後も教室以外の場所に取り出し練習をしてあげることで、すぐに授業準備行動を身につけることができるのではないかという示唆も得られました。般化については、就学後の行動観察を行うことができなかつたなど改良すべき点が残っており、今後も検討したいと考えています。

これらの研究から、通常学級において教室でのルール、つまり授業準備行動を身につけることが大切であることが分かりました。すると、次に教室のルールとは何かという疑問が湧いてきました。もちろんルールといっても学年や学級によって様々だと思いますが、ある程度共通したルーティン化しているものがあるはずと仮定し、就学後の低学年のうちに学ぶべき授業準備行動を明らかにしたいと考えました。博士論文でも、84名の教師に対して、15の学校場面(朝の用意、授業の開始時など)における「児童が身につけるべき適切な行動」に関する自由記述式調査を実施しましたが、曖昧な記述なども

あり、再分析を行う予定です。共通した教室のルールが明らかになることで、発達障害児の学校生活への適応を促すことができると考えています。教室内のルールとは何か(理解しやすいルールもしくは理解が難しいルールは何か)、発達障害児はどの程度ルールを理解しているのか、またルールを理解することによってどのような利点が見られるのかといった疑問を今後の研究で明らかにしたいと考えています。就学前の準備や就学後の少しのフォローによって、発達障害児が通常学級で生活しやすくなることを期待しています。最後になりましたが、私の研究活動の基盤となっているものは「科学者-実践家モデル」であり、常に現場に身をおくことを忘れず、「実践家」であり「科学者」であり続けたいと思っています。このような機会を与えて頂き、本当にありがとうございました。

引用文献

道城裕貴・松見淳子(2007). 通常学級において「めあて&フィードバックカード」による目標設定とフィードバックが着席行動に及ぼす効果, 行動分析学研究, 20, 118-128.

道城裕貴・原説子・山本千秋・田中善大・江口博美・松見淳子(印刷中). 模擬授業場面における就学前の発達障害児の授業準備行動に対する行動的介入. 行動療法研究.

自著を語る: <あなた>の人生をはじめのためのワークブック:「こころ」との新しいつきあい方・アクセプタンス&コミットメント

立命館大学 武藤 崇

どうも。たいへん遅くなってしまって、すみません。思ったより西陣署から遠くて、しかも登りなんですね。自転車に来るんじゃなかったあ... 修学旅行のときに自転車で廻った記憶だと、もっと近かったような気がしたんですが... あ、はじまして、フルハタと申します。よろしく願います。あなたが、第一発見者のヨシオカさ

んです。お忙しいところ、すみません。

いや~、大学に来るなんて何十年ぶりのことなんで... 最近の大学は随分とキレイなもんですね。びっくりしました~ ここが、その部屋ですかあ。盗難に遭われたのは、段ボール箱で9箱、300冊。本の特徴は? B5版で、300ページくらい。色は緑。厚さは、どのくらいですか?

1.2センチ、なるほど... え、ありますか？
 お願いします。あ、いいんですか？ ありがとうございます。あの...このヨシオカって、ヨシオカさんのことですか？ それじゃあ、是非、サインをいただけませんか？ ついでに「フルハタさん江」って、ここに。どうも、ありがとうございます。大事にします。そうそう、このこと、イマイズミには、くれぐれも内緒にお願いします。そうです、あの「おでこ」の。

それにしても、出版社の倉庫でもないのに、なんでまた、そんなにたくさん本があったんですか？ 買い取り？ 本の価格を下げる？ なるほど、そうすれば、本の価格は下げられるんですね～ 知りませんでした。勉強になります。それで、お手元に本がたくさんあったんですね。まるで、「売れない」演歌歌手みたいだ。あ、すみません...口が過ぎました。私が大学生の頃には、高いのに、たいして使わない教科書を随分と買わされた記憶しかな...なんだ、イマイズミ！

今、お話を聞いているところ...え？ 絵なのに動いて見える？ まったく何言ってるん...ホ、ホントだ。不思議ですねえ...これも心理学の分野？ え？ ハトも！ 心理学って、随分と幅があるものなん...うるさいなあ！ いいからあ、早く、鑑識のところへ行きなさい！ どうも、すみません。騒々しくて...

(フルハタ、本を開きながら)「苦悩とは、苦痛以上のもの」ですか...んん...それは「ひき逃げとは、交通事故以上のもの」みたいなものでしょうか？ 人を撥ねてしまったら、逃げ出さなくなる気持ちも分からなくもないけど、そこで、逃げ出してしまったら、「過失」つまり誰でも遭遇する可能性のあるものではなく、「犯罪」になってしまう。そして「過失」を「犯罪」にしないためには、その場に踏みとどまる「勇気みたいなもの」が必要となる... それに似ていますか？

すみません、唐突過ぎました。しかも、内輪

な話題に引き寄せ過ぎました... それと... 昨日、付け焼き刃で『方法としての行動療法』という本を買って見たんです。その中で印象的だったのは「行動療法は大病理理論や大人間理論をもっていない」(Pp. 41)というところだったのですが、この本は、どうも、その病理理論や人間理論を語っているように見えます... もし、そうだとしたら、それは、行動療法にしてみたら「事件」なのではないでしょうか?... すみません。失礼しました。素人の浅知恵で分かったような口をたたきまして...どうか、お忘れください。

今日は、お忙しいところをありがとうございました。また、何かありましたら、ご連絡させていただきます。ご協力、感謝いたします。あの～...最後にもう一つ。おトイレは、どちらになりますか？ <画面暗転> -フルハタの背後からライトが照らされ、こちらを振り返る -

え～...今回の「事件」のポイントは「勇気みたいなもの」です。なぜだか、お分かりですか？

その答えは...CMの後で。フルハタ・ニンザプロウでした。

- このお話にある「立命館大学心理学研究室・書籍大量盗難事件(京都市北区等持院北町)」は、もちろんフィクションです。 -

【参考・引用文献】

三谷幸喜. (1996). 古畑任三郎. 扶桑社文庫.
 山上敏子. (2007). 方法としての行動療法. 金剛出版.

【当該書籍情報】

<あなた>の人生をはじめるためのワークブック:「こころ」との新しいつきあい方・アクセプタンス&コミットメント S.C.ヘイズ & S.スミス(著) 武藤 崇・原井宏明・吉岡昌子・岡嶋美代(訳) プレーン出版 定価 2400円(税別) ISBN 978-4-89242-927-9

「行動分析学が学べる日本の大学・研究機関」情報更新のお願い 研究教育推進委員会・広報委員会

前号で「行動分析学が学べる大学」への情報の提供・更新のお願いを致しましたが、思うように情報が集まっておりません。多くの大学がシラバスを Web で公開するようになった現在、学会として情報を集積し公開することの意義は薄れてきたと言えるかも知れませんが、日本における行動分析学の普及をアピールするデータとして貴重なものであると同時に、通信制大学や、大学院を持たない大学で行動分析学を志す学生にとっては有効な情報源であると思います。

6月以降、大学にお務めの会員の皆様には、個々に情報提供・更新のお願いのメールを差し上げる予定であります。重ねて協力の程、お願い申し上げます。

メールで情報を戴ける方は、以下の項目にご記入の上、bap@j-aba.jp までお送り下さい。記入例は、既存の <http://www.j-aba.jp/university.html> を御参照下さい。尚、情報の正確さを期すため、情報提供は教員の方に限らせて戴きます。

編集後記 ニューズレター編集部

今回は第26回年次大会開準備委員会から、大会の企画を御紹介戴きました。シンポジウム、招待講演、そして教育セッションと、どれも興味深いテーマばかりで、今から楽しみです。一般発表も100件を越

えて、今年も一段と《熱い》年次大会になりそうです。準備委員会の皆様には、正に《嬉しい悲鳴》と思いますが、私達会員にとっては、ますます期待が高まってまいりました。宜しくお願い致します。

ニューズレター編集部よりお願い

- ニューズレターには個人情報に記載されている場合があります。御覧になった後、処分の際には十分に御留意下さいますようお願い致します。
- さまざまな内容の記事を随時募集しています。詳しくは望月までメールでお問い合わせ下さい。尚、記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブ

サイトで公開いたします。

192-0395 八王子市 大塚 359
帝京大学文学部心理学科内
日本行動分析学会ニューズレター編集部 望月 要
E-mail: moc@main.teikyo-u.ac.jp